

2023年3月19日 礼拝説教要旨

詩編講解説教141「香り高き祈り」

詩編141：1～10、ヘブライ10：11～14

第141編は全体を通して個人的な祈り、嘆願となっています。祈りの内容からするとこの詩人はかなり厳しい状況にあり、窮地に立たされています。敵が自分を陥れようとして罾を仕掛けて狙っているのです。これも「ダビデの詩」とありますから、サウルの執拗な攻撃で追い詰められたダビデの心境がここに表されていると捉えることもできるでしょう。わたしたちも厳しい状況の中で祈ることがあると思います。試練にある時、それこそ八方塞がり自分が追い詰められていると思うような時があります。その時にわたしたちはどういう祈りをしているでしょうか。その状況から救い出してください、助けてくださいと祈るでしょうか。

「主よ、わたしの口に見張りを置き、唇の戸を守ってください。わたしの心が悪に傾くのを許さないください。悪を行う者らと共にあなたに逆らって、悪事を重ねることのありませんように。彼らの与える好餌にいざなわれませんように」（3～4節）試練の中で詩人は、まず言葉で罪を犯さないように、わたしの口に見張りを置いて、唇の戸を守ってくださいと祈ります。また心が悪に傾かないように、自分自身がかえって悪に加担しないようにと祈るのです。「彼らの与える好餌」とあります。「好餌」（こうじ）というのは文字通り「好きな餌」ということですが、餌につられて悪になびかないようにということなのです。つまりここでは悪の誘惑に負けず、悪に抵抗できるようにと祈るのです。単に試練の中でそこから助けてくださいと祈るのではなく、試練にあっても罪を犯さないように、悪に傾かないように、毅然と悪に抵抗できるようにと祈ります。

わたしたちは自分でも気づかぬうちに悪に加担していることがあります。『ハイデルベルク信仰問答』では「わたしは神と自分の隣人を憎む方へと生まれつき心が傾いている」（問5）と告白しますが、これは決して誇張ではありません。実際にわたしたちの心は簡単に悪に傾くのです。サタンは巧妙ですからあらゆる手段を持って悪に誘います。例えば、わかりやすいところでは今起きています戦争はなかなか厄介です。深刻なのは多くの国々が武器を提供し、さらには自分の国でも軍備を増強しています。もはや臨戦態勢です。これは悪を持って悪に抵抗している状態です。また世の中には、急進的な環境運動や平和運動があります。平和のため、環境のために何とかしなければならぬという衝動にかられるのでしょうか。問題なのは、その目的のためなら手段を厭わないということになる。暴力をも容認するようになる。しかし聖書は「悪に負けることなく、善をもって悪に勝ちなさい」（ローマ12：21）と言っています。悪に悪を返しても、それはサタンの思う壺でしょう。それでは結局罪に取り込まれてしまうのです。ではどうしたらよいのでしょうか。

5節後半に「彼らの悪のゆえに祈りをささげている間は」とあります。ある聖書学者は「わが祈りは彼らの悪に抵抗しているのです」（関根正雄）と訳します。悪に悪を返すのではなく、悪行の中にあってもなお祈る。祈りで抵抗する。それがわたしたちの戦い方だと聖書は教えています。わたしたちは、祈りは何の力にもならないと考えるかもしれません。「祈っています」と言っても結局何もしないではないか、何もできないではないか。しかし祈りそのものが悪への抵抗だということを忘れてはなりません。祈りは神さまのもとに逃れることだからです。

「主よ、わたしの神よ、わたしの目をあなたに向け、あなたを避けどころとします。わたしの魂をうつろにしないでください」(8節) ここは聖書協会共同訳がとてもよい訳をしています。「主よ、わが主よ、あなたに目を向け、あなたのもとに逃れます。わたしの魂を捨て置かないでください」新共同訳の「わたしの魂をうつろにしないでください」という部分は、原文に従えば、魂を裸に晒す。無防備のままに放置するということです。わたしたちの生きている世界は、魂があまりにも無防備であり、危険にさらされているのです。それはこの詩編を読んできた3年足らずのこの世界の現実からも明らかでしょう。コロナ、戦争、災害。その中で魂が裸のまま晒されている。戦禍にあるウクライナの子どもたちの心のケアが問題になっています。憎しみと怒りに魂が捕らわれてしまっている。その魂が神さまのもとに逃れなければ、神さまの力を纏わなければ、人間は健やかに生きていくことはできません。なぜなら人間は神さまによって、神さまのかたちに造られているからです。神さまによって命の息を吹き入れられた、その部分がまさに「魂」なのです。魂が神さまのもとに逃れること、それが祈りに他なりません。そしてこの祈りによってこそ、わたしたちは悪に抵抗していくのです。そこでこそ悪に傾かない力を得るのです。

今、教会は受難節にあります。主イエスが十字架におかかりになられるときにゲッセマネで激しい祈りをされたことを思い起こします。ルカでは「苦しみもだえ、汗が血の滴のように地面に落ちた」とあります。それほど激しい祈りをされた。それは祈りが何より罪に抵抗するものだからです。悪に悪を返すのではない。善をもって悪に勝つ。その抵抗の祈りをまずキリストが祈ってくださいました。そのキリストにあわせられて、わたしたちも祈ることができます。ヘブライ人への手紙に「キリストは肉において生きておられたとき、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を氏から救う力のある方に、祈りと願いとをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました」(5:7)とあります。このキリストの祈り、とりなしによって、わたしたちの祈りは香り高い供え物として御前に届けられます。誘惑の多い世の中ですが、だからこそ祈りの火を絶やさずに悪に抵抗していきましょう。

天の父よ。悪を持って悪に返すような仕方では、悪に抵抗できないわたしたちの弱さ、限界を覚えます。だからこそあなたはあなたのもとに逃れ、善をもって悪に抵抗できるように祈りを教えてくださいました。そしてわたしたちの拙い祈りを御子の十字架の贖いによりまして、香り高い供え物として御前に届くものとしてくださいます。どうぞ常に罪に晒される厳しい現実の中でも祈りを絶やすことがありませんように、祈りの生活を強めてください。主の御名によって祈ります。アーメン。